

## 地域主導による災害アーカイブの蓄積と活用に向けた試み

岐阜大学	正会員	○小山 真紀
東北大学	非会員	柴山 明寛
かわべ防災の会	非会員	平岡 守
NPO 法人ドゥチュウブ	非会員	荒川 宏
清流の国ぎふ 女性防災士会	非会員	伊藤三枝子
岐阜大学	正会員	村岡 治道

## 1. 目的

防災・減災の観点から、過去に起きた災害の記録は、次なる災害の備えを行う上で、非常に有用な情報である。よって、地域防災を推進する上で、災害アーカイブは非常に有用なツールとなり得る。岐阜県においても、地域で防災活動を行っている有志によって、災害アーカイブの構築と活用に向けた機運が高まりつつあるが、地域にとって効果的なアーカイブやプラットフォームのあり方そのものについても、まだ発展途上にある。そこで、我々は岐阜県内における災害アーカイブとそれを活用するプラットフォームの環境構築を目的とした研究を開始した。本研究では、災害アーカイブの構築だけでなく、災害アーカイブに格納するためのデータ収集と必要なメタデータの付与と、災害アーカイブに格納したデータの活用まで連動させ、地域防災に活用する方策を提案することを目的とする。本論では、災害アーカイブの構築と、災害アーカイブに格納したデータの活用について報告する。

## 2. 災害アーカイブの構築

災害アーカイブの構築にあたり、格納すべきデータの収集と、ガイドラインの作成、サーバの構築を行った。災害アーカイブに関しては、オンライン上にサーバを置き、そこに、デジタル化したデータを格納する方式とした。サーバは、東北大学に設置し、防災科学技術研究所が開発したeコママップを用いて環境整備を行った。災害アーカイブのガイドラインについては、岩手県復興局によるガイドライン<sup>1)</sup>を参考にして、本研究に適用できるようなガイドラインを作成した。データの収集については、第一段階として、1968年8月17日に発生した飛騨川バス転落事故に関する写真、手記などの文書の収集を行った。その結果、川辺町を中心に写真資料92点、文書資料6点を収集し、写真資料については、そのうち82点について、撮影場所の特定を行った。

## 3. 災害アーカイブを活用したワークショップの試行

2018年2月17日に災害アーカイブを活用したワークショップの試行を行った。開催場所は岐阜県川辺町であり、対象者は一般の住民の方である。ワークショップは、地域の災害危険度を知ることが目的とし、飛騨川バス転落事故当時の写真と、現在の同じ場所の写真、当時の資料、地図を用いて、災害時に地域がどのような

表1 ワークショップ参加者

所属	人数
かわべ防災の会	15
一般	13
げんさい未来塾 OB	2
げんさい未来塾生	1

キーワード 災害アーカイブ, 住民参加, 防災ワークショップ, 川辺町, 災害伝承

連絡先 〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸1-1 岐阜大学流域圏科学研究センター TEL: 058-2933-2441

状況になるか、浸水や土砂災害の発生の恐れのある場所はどこかという点について、参加者同士で意見交換を行った。ワークショップは、趣旨説明、ハザードマップの確認、飛騨川バス転落事故の振り返り、当時の写真と現代の写真の場所を地図上に貼り付け、地域の災害をイメージする、飛騨川バス転落事故当時の話から、現在大きな風水害が発生したら地域がどうなるかについてディスカッションし、その結果について発表。という流れで行った。

表1に参加者の人数を示す。ここで、かわべ防災の会とは、川辺町で開催された防災研修修了者を中心に結成された地域防災に取り組む団体である。げんさい未来塾とは、清流の国ぎふ 防災・減災センターが行っている実践的防災人材育成プログラムのことである。一般とは、それ以外の参加者を指す。当日の様子を写真1に示す。幅広い年代からの参加者があり、参加者の中には、飛騨川バス転落事故当時、遺体捜索に係わったり、活動に関わってはいなくても当時の状況を記憶している人もおり、グループワークでは、各グループ内で当時の状況について、多様な語りがなされていた。語られた内容は、文書としての記録には記されていない話も多数あり、飛騨川バス転落事故という事柄は知っていても、参加者の語りによって、相互にはじめて知る話も多数あったようであった。

ワークショップ参加者に、参加した感想を書いてもらったところ、今回のワークショップで、災害アーカイブの重要性が分かった、過去の災害を次世代に伝えることの重要性を再認識した、自分の居住地域でもやってみたいなど、災害アーカイブの重要性と、そのデータを地域防災に活かすための具体的なイメージをつくることができていることが確認できた。



写真1 ワークショップの様子

#### 4. まとめと今後の課題

これまでの研究で、サーバの環境構築、アーカイブの収集・活用ガイドライン、集めた後のデータ活用方法の提案までを行い、収集データの活用については、地域防災に有用であり、継続的な活用も可能であると思われる。今後は、データの収集とメタデータ付与を防災ワークショップとして提案することで、データの収集、メタデータ付与、格納データの活用という一連の流れを確立し、継続的なアーカイブの構築と活用サイクルの提案を目指す。

#### 謝辞

本研究は、東北大学災害科学国際研究所共同研究助成によって実施された。

#### 参考文献

- 1) 岩手県復興局：震災津波関連資料の収集・活用等に係るガイドライン，2016。